

絆求めて

10月13日発行

文責 私学振興専門員 久保田学



「子どものほめ方・叱り方」

絆求めてNO21で、本田秀夫先生の著書「子どもの発達障害 ～子育てで大切なこと、やってはいけないこと～」(SB新書)を紹介しました。今回はそのご本でふれている、「第3章 発達障害の子のほめ方・叱り方」をもとに、子どものほめ方・叱り方についてまとめてみました。日々子どもたちの保育に係る中で、ほめる場面、叱る場面は何度もあるかと思えます。しかし、時にはその対応に迷う場面もあるのではないのでしょうか。先生のご著書では「発達障害の…」と限定的なタイトルになっていますが、読んでみると、全てのこども達につながるものと感じました。

(1) ほめる = 子どもの気持ちを汲み取り、共感すること

「子どものやりたい」 ≠ 「親のやらせたいこと」

こどもは自発的に伸びていく芽があり、その芽を見つけて、そのまま伸ばすこと！

*大人は、自分が子どもにやらせたいと思っていることを、その子が努力して成し遂げた時に、ほめようとする→「よくがんばったね」「その調子」←こどもはどう思っているか

*こどもが一番自信をつけるのは(=自己肯定感を高める)、自分が好きなこと、興味をもっていること、得意なことをほめられたとき



ポイント) ◎こどもの「やりたいこと」「好き」をほめることが大切

*本人が、「やりたい」と思っていることを達成して、いつもの平常心と違って、少し興奮しているような時に、その達成感に共鳴するような形で「ちょっと、ほめる」(さりげなく)

*下心なくほめる(子どもは、下心のある言葉は聞き流す、下心はこどもに伝わる)



ポイント) ◎素直な気持ちで、下心なくほめることが大切

<ほめ方のコツ>

- ①年齢によりほめ方を変える
 - ・幼児期…どンドンほめる(あまり色々と考えない)
 - ・学童期…さりげなくほめる 例) やるじゃん! やったね!
 - *ただし、年齢の目安は、子どもにより違う
- ②動作を入れてほめる
 - ・ハイタッチ(話し言葉で物事を理解するのが苦手な子に有効)
 - (幼児期の子には特に有効)

(2) 叱る = 子どもに行動を改めてほしいときにする行為

「本気」で叱る **しっかりと考えて叱る**(*だから、めったに叱らなくなる)

叱り方の種類 { ①教えるために叱る…こどもに行動を改めて欲しい。そのやり方を教える。

{ ②憂さ晴らしで叱る…感情的、憂さ晴らし

{ ③その場をおさめるために叱る…相手の気持ちをなだめるためにする

①のポイント…教えたことが子どもに伝わったかを確認する

②のポイント…そういうことがあることを理解しておく(長々叱らない、後で謝る)

③のポイント…ポーズで叱る、効果は期待しない、別の機会に適切な行動(対応)を教える



ポイント) ◎叱り方には3種類ある。自分は何の目的で叱っているか理解する

ポイント) ◎①の教えるために叱る以外は、効果が薄いことを理解する

<叱り方のコツ>

- ①適切な距離感をもって叱る…親戚の子位の意識で、入れ込みすぎない
- ②年齢で叱る回数を調節する…年齢が上がるにつれ、叱る～話し合いに
- ③肯定文で叱る…「走っちゃダメ」→「歩こうね」 「○○しちゃダメ」→「□□した方がかっこいいよ」 など
- ④交換条件を出さない…「○○ができれば、□□してもいいよ」*できないとペナルティを課すことになり、お互いの関係を悪化させる
- ⑤いたずらはスルーする…いたずらは、子どもが親の関心を引くためにする場合が多い。だから、反応せずにスルーすれば、自然としなくなることが多い。
*危険ないたずらは、行動を伴って止める
- ⑥ほめる機会を増やす…適切な行動がとれるようになれば、おのずと「叱る」回数は減る

◎こどもの行動を改める最善の方法は、「叱る」ではない。だから、こどもの行動を本気で考えて、叱る回数を減らすことが重要→こどもの適切ででない行動を誘発する環境をつくらない

◎発達の最近接領域* (レフ・セミヨノヴィチ・ヴィゴツキー) …何度叱ってもこどもの行動が改まらない(改善しない)場合、その子はまだ、その内容を学ぶ段階になっていない→叱るよりも課題を見直すこと

*子供がひとりではできないが、外部の助けがあればできる物事の領域→

- 手伝いがあってもできないレベル=未完成水準
- 手伝いがあればできるレベル=可能的水準=発達の最近接領域
- 自分一人のできるレベル=完成した水準

◎叱らないためには、「高望みしない」

- ・「せめてこれくらいは…」は高望みライン (これは、親が無意識に引いている最低ライン)
- ・親が欲をかけばかくほど、「叱る」が増える
- ・最低ラインを下げると、子どもを肯定的にとらえられるようになる。子どもは安心して様々な活動に取り組めるようになる

発達の最近接領域(レフ・セミヨノヴィチ・ヴィゴツキー)の考え方は、教育を考える上で非常に重要な考え方と思います。ある解説では、「算数を勉強するときに、「ひとりで解くことができる問題」を100問解くよりも、「先生や友達の助けがあれば解くことができる問題」を10問解くほうが効果があるという主張があります。「ひとりで解くことができる問題」をいくら解いても新しい力や知識は身に付きません。(以上 <https://gimon-sukkiri.jp/zone/>より引用)と説明されていました。

このヴィゴツキーの発達の最近接領域の考えは、保育の現場でも重要視されています。保育者が働きかけによって子どもの発達を先に進めることができるよう、いかに一人一人の子どもの発達の最近接領域を把握し、有効な働きかけをするかが重要ということです。そして、その子の発達を促す上で、手助けをどのようにするかを組み立てることが大切になります。今回のテーマ「ほめる・叱る」とは内容がずれてしまいましたが、保育をマネジメントする上で、大切な視点と感じ、触れさせていただきました。(専門員)